

ツツコミの日本史

うらにわ丹波守



織田信長、武田信玄、上杉謙信、島津義弘、伊達政宗・・・。

綺羅星のごとき名将たちが智恵の限りを尽くして戦った戦国時代。彼らを彩るエピソードは事欠かない。

しかし・・・。

彼らのエピソードをよくよく考えてみると、若干頸をかしげざるを得ないものも多い。

そんな戦国大名たちの行動を冷静に観察してみた、と、というのが本書です。

きっと、あなたも戦国武将が身近に感じられると思います。

そう、暑苦しいくらい身近に・・・。

数ある戦国武将の中で最もカリスマ的人気を誇る『越後の龍』こと上杉謙信。

熱き漢（おとこ）が魅せる義侠心。

彼に魅了される人は跡を断ちません。

しかし、そんな彼の逸話をよくよく読んでみると、中学生の体育会系男子部室のようなモワッとした、暑すぎる無茶な逸話が多いことに気がつきます。

今回は、戦国武将の逸話集である『名将言行録』から戦国のカリスマを考えて見たいと思います。

「輝虎（上杉謙信の本名）は、体が小さく、左脛（すね）に腫れ物があって、引きずっていた。」

え…、謙信が小さい？

戦国の世を駆け抜けた英雄。しかも戦をさせたら敵無しの最強武将。その謙信の体格が小さい、だと？意外な。

昔の日本人は、栄養状態の良い現代の日本人に比べて背が低かったといわれています。その中でも「小さい」と書かれてしまう謙信。今の日本人からすると、かなり小柄に思えてしまうかもしれない。

すると、何か。

身長174cmの筆者が謙信と並んだ場合、筆者は謙信を見おろせる。

それこそ、

「おい謙信。小田原のコーラが飲みたいから買ってこい。」

と、頭を小突いて命令することもできる、かもしれない。

まあ、そんなことした日にゃ、ただでは済まないでしょうけど。

そして、左脛に腫れ物があり足が不自由とある。

単身敵陣真っ只中に乗り込み、宿命のライバル武田信玄に斬りつけた逸話も残る謙信だけに意外な話だ。

謙信は他にも馬に乗って戦う話が多く残されているので、腫れ物は晩年になってできたのではないかと考えられます。

戦国のカリスマ上杉謙信の意外なイメージを確認したところで、いよいよ神をも凌駕するカリスマ的逸話をご紹介します。

「巨蛇を打つ」

上杉謙信が諏訪神社を参拝すると、大蛇が出てきました。

これを見た巫女さんは、

「この蛇は神の化身です。神様がお出になられたからには、殿の願いは叶います。おめでとうございます。」

と、言った。

すると謙信。いきなり鉄砲をぶっ放して大蛇を撃つ。

大蛇は大怪我をして逃げていき、その時、神社の木々は一斉にざわめいたとか。

しかし謙信が笑って言うには

「神に形など無い。あの長いものが何だというのだ。人が神だと騒ぎ立てると騒ぎが大きくなって、必ず後で害になるのだ。今、ワシは民の害を取り除いてやったのだ。今日は良いことをした。」

と、神社を拝んで帰る。

家臣たちは崇りを恐れるものの、謙信には何もいえない。

夜になって、謙信は熱を出して寝込んだ。

医者が診ると、全身から蛇が出ている。

しかし、謙信は部下に命じて蠟燭をつけさせ、一匹ずつ取り除かせたところ、しばらくして治ったそうなの。（了）

迷信を一笑に付して神の化身といわれた蛇を鉄砲で撃った謙信。

「あの長いものが何だというのだ。」と言ったときの謙信はきっと輝いて見えたに違いない。

しかし、その夜に高熱を出して全身から蛇が出ます。

殿、それを崇りというのです。

確かに「神だと騒ぐと収拾が付かなくなる。」という彼の理屈は為政者として正しい。そこで話が終わってこそ、

「さすが謙信。剛毅なもんだ、いよ、戦国のカリスマ！」

と、いえるのですが、結果として、どう考えても崇られてるとしか思えない。

「オチ」つけてどうすんだ、謙信。

そもそも「全身から蛇が出ている」状況って、どんな状況なんだ。

髪がメドゥーサみたいになっちゃってるのか？

目、鼻、耳といった穴からチョロチョロと出ちゃってるのか？

股間から出ているその蛇は、本当に蛇なのか？

想像するとかなり怖い。

そんな主君に「悪い。すまんがこれを取ってくれ。」

と、言ってこられた日にゃ、部下も断れない。一匹ずつ根気よく蛇を取り除いたことでしょう。さぞ
気味悪かったと思いますが。

家臣にしてみれば内心「だから言わんこっちゃ無い。」と思ったかもしれません。

そもそも、謙信が武田色の強い諏訪神社へ行っているのも不思議。

原文は「諏訪祠」となっているので、どの諏訪神社かはわかりません。謙信が活着している間に武田
領だった諏訪大社に参拝に行く状態は考えにくいので、想像するに上杉領内にあった分社ではないか
と思われます。

とはいえ、鉄砲で撃った後の謙信は、きっと相当な「どや顔」であったことには間違いない。そして
、「民の害を除いたのだ！」と高らかに宣言する彼は、神々しくすらあったかもしれません。少し自
分に酔っている気もしますが。

巫女さんは啞然とし、部下もびびってるけど謙信には恐れ多くて意見ができない。

組織に属している人間の悲哀もそこはかたなく感じられる、そんな光景が目には浮かびます。

しかし、こんな常識はずれな行動を取る彼に我々は魅了されるのでしょう。

とはいえ、「越後の龍」が「蛇」にやり返される、っていうのも、どうなんだかねえ・・・。

森蘭丸。

美少年の代名詞的存在として知られます。

織田信長の小姓として抜群の事務処理能力を発揮し、信長から寵愛を受けた人です。

その才能だけでなく、本当に愛されていたといわれています。

愛される・・・？

そう、昔の武士は教養の一つとして剣道、茶道に勤しむように『衆道』をたしなんでいたといわれています。

どんな『道』なのか。

ありていに言ってしまうえば「同性愛」

現代と大幅に価値観が違う分野とも言えるでしょう。戦国武将にとっては当たり前のことだったようです。

理由としては、戦争に行く際、女性との接触が縁起担ぎ的によろしくないで男性で済ませることがあった、とか、戦国武将が教養を身につける手段として通った禅寺の「文化」を学んでしまったとか言われています。お寺、特に禅寺は女人禁制が厳しく、お坊さん方も衝動を抑えきれずお稚児さんに手を出していたようです。こうした「文化」が戦国武将を育んだといえるのかもしれませんが。

農民から成り上がった豊臣秀吉は、そうした文化を学ぶ機会がなかったためか、戦国武将には珍しく男性に興味がなかった、という逸話があります。

ちなみに信長と蘭丸。

通常、元服（ざっくり言うと成人式）すると前髪を落とし、いわゆるちょんまげ頭になるのですが、信長から暫く前髪をつけとけ、と、言われたとか。

信長様の好みわかりますし、なかなかのマニアっぷりを見せています。

さて、そんな二人に関する逸話として『名将言行録』では以下の話を紹介しています。

「信長の爪」

信長がある時爪を切り、小姓に捨てるように命じる。

爪を貰った小姓がそのまま捨てに行こうとすると、「待て」と信長に止められる。

2・3人が同じような感じで止められていると、蘭丸がやってくる。

信長は蘭丸にも同じように捨ててくることを命じると、蘭丸は爪の数を数え始める。

すると、爪は9個しかない。

「あと一つはどうされましたか？」

と、蘭丸が信長に尋ねると、信長は袖を払った。

すると、爪が一つ、ぽろりと落ちた。蘭丸をそれを拾い計10個になった爪を堀に捨てに行きました

。信長は、

「あいつはワシのことをよ〜く考えとるわ。」

と、言い、ますます寵愛した。

「障子開け」

蘭丸が障子を開けてきたので、信長は閉めてくるよう命じた。

蘭丸が行ってみると既に閉まっていたので、わざと障子を開けてから「ぴしゃり」と音を立ててまた閉めて戻ってきた。

実は信長は障子が閉まっていることを知っていて、わざと申し付けたのだった。しかし、障子を閉める音がしたので不審に思い、

「障子は開いてたんか？」

と、聞くと、

「いえ、閉じておりました。」

と、蘭丸は答える。

「でも『ぴしゃっ』って音がしたがや。なんでだ？」

と、信長が聞くと、

「殿が障子が開いているから閉めてこい、と、皆の前でおっしゃり承りました。そこへ障子が閉まっておりましたと申し上げることは、殿のお間違いを指摘するようで申し訳なく、わざと開けてから音を立てて皆に聞かせたのです。」

と、言った。

この二つの逸話、信長はちょっと意地が悪い。

なんとなく、おネエ系のイタズラ的な感じ、と、いうと勘ぐり過ぎでしょうか。いや、ひょっとしてこれらは、信長と蘭丸の愛の確認作業なのかもしれません。

ここで注意していただきたいのは、信長が蘭丸をいたぶる、俗に言う「S」を演じているようで、実は、冷静に答えている蘭丸に振り回されているようにも見受けられます。

二人の間で『主人』の関係が入れ替わっていく、そんな様子が見て取れる、と、言っても良いのかもしれません。

そして、二人の関係は次のように発展していきます。

「蜜柑（みかん）運び」

ある坊さんが信長に謁見する際、蜜柑を沢山台に載せて献上した。

蘭丸がそれを見せようと信長の元へ運んでいく途中、

「お前の力では危ないて。倒れてまうぞ。」

と、信長が言った。

案の定、蘭丸は座敷の真ん中くらいで台を持ちながら倒れてしまい、台は壊れるは、蜜柑は座敷中に散らばるは、と、いった始末に。

「それみる。だもんでワシが言ったとおりになってまったがや。」

と、信長は言った。

翌日、周りの人達が蘭丸に昨日は殿の前で恥かいてしまいましたね、と、いうと、蘭丸は、

「別に。」

と、いう。

「殿が危ないと言っているのに、私がちゃんと運んでしまえば、殿の目利きが違うことになってしまいます。だからわざと転んだのです。主人の目利きが間違ふということは何につけても良くないのです。」

とのことだった。

聞いた人は皆感心した。

蘭丸を気遣う信長がいます。

信長を気遣う蘭丸がいます。

もはや、どちらが『ご主人様』というレベルを超えています。互いに精神的に深く依存しあう関係まで至った様が見て取れます。

抜き差しならない関係というか抜き差ししている関係というか。

我ながら下品なまとめだと思う。。。。

『家康に過ぎたるものが二つあり唐の頭に本多平八』

唐（から）の頭（かしら）とはヤクの毛をつけた兜のこと。南蛮渡来のヤクの毛は豪華品として珍重されていました。

それと同じく珍重されるような家臣であり、徳川家康には不釣り合いで勿体無い位だ、と、敵から讃えられた徳川四天王の一人、それが本多平八郎忠勝です。

飛んできた蜻蛉（とんぼ）が止まったら、そのまま「すうっ」と切れてしまったといわれる名槍「蜻蛉切」を振り回し、鹿角の兜を被って戦場を縦横無尽に駆けめぐり、生涯一度も傷を負うことが無かったと言われる男。

それが、本多忠勝。

後に平和な時代となったときに自分で爪を切っていて、うっかり小刀で小指を傷つけてしまった際に、自ら死期を悟ったといわれます。

残されている肖像画は、何度も何度も書き直させて自身の怖さを強調させた、という逸話が残っています。

実際肖像画を見てみると般若のような顔をした異相で、かなりな頑固オヤジ的な匂いが漂ってきます。

生涯無傷の男、本多忠勝の強さは人間離れしているとして、一部のゲームではロボットとして扱われていると聞いたことがあります。（なんじゃそりゃ。）では、一体どの程度だったのでしょうか。そんな忠勝の強さのバロメーターとなる話をご紹介します。

「長湫（ながくて）の戦い」

織田信長亡き後、羽柴秀吉と徳川家康が天下人の地位を賭けて争った小牧・長久手の戦い。羽柴方の森武蔵、池田勝入斎等が、硬直化した戦況を打開せんと、長躯徳川家康の領国三河へ侵入します。しかし、家康はそれを察知。先回りして、侵入軍の総大将池田勝入斎と森武蔵を討取ってしまいます。敗報を知った豊臣秀吉は大いに怒り、本多忠勝ら留守軍が守る徳川方の本拠地小牧山城には抑えの軍勢を残し、自ら八万の軍勢を率いて池田らが敗れた現場に急行して家康を捕捉しようとしています。（中略）

忠勝は部下に向かい、

「今ここで8万の秀吉本隊に戦を挑み命を落としても、秀吉の軍勢を一旦食い止めることができる。その間に家康公が体制を整えることができれば秀吉と戦える。忠臣の死すべき所は今こそ来たり。潔く一戦をとげ屍を戦場に晒し、その名を後世の残せ！」

と檄を飛ばした。時々秀吉の大軍に鉄砲を放ち戦を挑むが、寡兵の忠勝を無視して秀吉は軍を進めた

竜泉寺へ十町あたりの所で、忠勝は竜泉寺の川の端へ馬を寄せ、例の鹿角の兜を夕陽に輝かせ、落ち着き払って馬に水を飲ませた振る舞いを見た者は、皆、感心した。（中略）

秀吉は「五百に足らぬ兵でワシの八万の軍勢に戦おうとするとは千に一つの勝ち目も無かろう。しかし、ワシの軍勢を足止めして主君を勝たせようとするその志、勇氣、比類無き忠臣、本多かな。あのような者を撃つでない。」

と、弓鉄砲で本多隊を攻撃することを禁止した。（以下略）

夕陽に煌めく鹿角の兜。

敵味方にかかわらず、見る者全てを魅了したその勇氣。そして、敵将すら感動させるその忠誠心。

「比類無き忠臣」

敵将から最高の賛辞を得て、本多忠勝の面目躍如と言ったところでしょう。

しかし、そんな無傷の名将にも、心に傷を負ったのではないか、と思われる逸話があります。

「臭気に伏兵を知る」

ある戦いのおり、家康は忠勝を連れて物見（敵情視察）に出たところ、忠勝が言うには、

「殿、これより先へは行ってはなりません。今、私はウ○コを踏みましたが、細かくて臭いがひどい。多分、敵が近くにいるものと思われます。」

忠勝がそう報告する声を聞いて、敵の伏兵が現れた。

家康が引き上げる時もあぶなかった。

さすがは生涯無傷の男。

ウン○からでも見えざる敵を発見します。

ちなみに、糞で敵の伏兵を知る話は他にもありまして、案外ポピュラーなようです。

「世間太兵衛伏兵を知る事」

越後の一揆が三條の城に籠もった際、道に伏兵を置いた。

溝口伯耆守宣勝が兵を出して参上に行くにあたり、世間太兵衛が先陣を勤めたが、小川の脇に新しい糞が有るのを見て、「この辺に伏兵がいる。」と捜させたところ、伏兵が驚いて逃げていった。それを追いかけて百人あまりを討取った。

と、いう話が「常山紀談」という、これまた別の戦国逸話集にあります。

戦場であっても出る物が出る。

それが、人がいるシグナルになってしまうようです。糞一つとっても処理を適切にしないと命に関ってしまう、ということが世間太兵衛の逸話が示しています。

本多忠勝の場合は、逆にそれが命を救われる話になっているわけです。

しかし、世間太兵衛なる、世上あまり知られていない武将は、モノを見て気づきますが、徳川四天王に挙げられる名将本多忠勝は、そのモノを踏んでしまっています。

生涯無傷、ではあったようですが、ウン〇は踏んでいた、という衝撃の事実がここで発覚です。

まあ、傷を負ってないのは確かですが・・・。

家康としては、〇ンコ踏んだ直後の忠勝から報告を受ければ、

『う・・・、こ、こやつ臭い。』

と、思ったことでしょう。

ひよっとすると、

『こやつ、冷静な顔して敵情を報告しているが、ただ単に言い訳してるだけじゃないのか？』

と、疑念がよぎった可能性があります。

幸い、忠勝の報告後、すぐに敵が現れたので名将エピソードとなりましたが、敵が現れなければ、ただの「うっかり平八」。ウン〇踏むは言い訳するは、で、周囲から冷たい目で見られたにちがいない、心の傷になったであろうことは想像にかたくありません。敵がすぐに現れて、心底助かったのは忠勝だったといえます。

ところで、ウン〇と言えは主君の家康も負けてはいません。

三方ヶ原の戦いで武田信玄に負けた家康は、ほうほうの体で浜松城へ生還しますが、生命の危機にさらされた恐怖で馬上で脱糞していた、という逸話が残っています。

やっぱり天下統一するような人達には『ウン』が付くんですな。

宇喜田直家、と、聞いて、

「ああ、あの暗殺名人ね。」

と、ピンと来たアナタ。お好きですね。

宇喜田という苗字は、豊臣秀吉の養子になった直家の次男、宇喜田秀家によって、少しは知られているかもしれませんが、少数派だと思いますので、少々、彼に関する説明をいたしましょう。

宇喜田直家は、岡山県付近を治めた戦国大名で、混乱する備前の国で下克上を果たし、毛利と織田という強国の間に挟まれながらも時流を読んで対応。宇喜田家は豊臣政権下で優遇され次男の秀家は五大老の一人にもなります。

そんな直家ですが、下克上を行う際、次々と敵を暗殺していったことでも有名です。

しかもその方法が、結構エグイ。

例えば、

敵Aを倒すため、まずAと仲の悪い別の武将Bに直家の部下を偽って投降させます。

その際、部下は見知らぬ浮浪者の老婆に「おっかさん！」呼びかけ、家に連れて帰り、良い暮らしをさせます。老婆はCは息子と違うとは知りながらも、待遇が良いのでついCの下で暮らしてしまいます。

ところが、部下はBに投降した証としてその老婆を『母』として人質に差し出します。ところが、その後、部下はBを裏切りAに投降します。哀れなのは老婆。Bは部下への見せしめに老婆を殺害します。

それを見とどけた部下は、

「母親の仇を討ちたいので、A様の力をお貸しください。」

と、涙を流しながら、今度はAに投降します。実の母親を殺されたと騙されたAは、すっかり部下を信用してしまいます。そして暫く部下はAに仕えますが、Aの隙を見た部下はAを殺害。宇喜田家に帰還します。

この筋書きを裏で糸引いたのは、宇喜田直家。

暗殺という手段自体は、他の武将も多用しており直家だけが非難されるものではないですが、浮浪者の老婆は捨て駒として、少々の良い暮らしと引き換えに生贄にされてしまったのです。

策と言えば策ですが、どうにも後ろ暗さがつきまとう策です。そして、実際、直家のやり口を知っている家中の者達は、主君直家を恐れたとも言われています。

なかなか恐ろしい技を繰り出す主君宇喜田直家。そして、彼を恐れながらもその指示に従い密命を遂行する部下達。

下克上といえはなんとなく格好いいですが、現代風に宇喜田家を解釈すると部下を犠牲にすることすら厭わない『ブラック企業』として、堂々認定されそうです。

さて、こんなブラック企業宇喜田家で、社長が死ぬ間際に気が弱くなってしまったらどうなるのか、という逸話があります。

「殉死（じゅんし）のこと」

（※殉死とは主君が死んだら忠誠を現すために主君のあとを追って家臣が自殺してしまうこと。）

宇喜田直家の病が篤くなり、治らないと思った直家は近臣を呼んで言う。

「お前、ワシが死んだら殉死してくれるか？」

聞かれた者は、君恩浅からず、ということから

「願わくはあの世までお供致しとうございます。」

と、皆答えざるをえない。

直家は大いに喜び、約束の証じゃ、と、いって皆に盃を与えて名前を札に書き、

「ワシが死んだらこの札を棺の中に入れてくれ。」

と言う。そして部下の戸川肥後守秀安を呼び、

「彼等は皆死んでくれると言う。お前はどうか？」

と、聞くと秀安が言うには、

「人にはそれぞれ才能があります。私は若輩ながら軍に当たっては堅塁を破って敵の鋭鋒を挫くことは、常に皆に劣ることはありません。これは私の才能です。しかし、殉死はなかなか難しいです。これは私の才能が劣るからです。殿が殉死の者を求めるならば、むしろ日頃帰依している法華宗の僧侶がよろしいかと思えます。冥途はこの世とは違いますが、僧侶が引導を渡すのは成仏できるからです。いわんや殉死して殿を導けば、必ず極楽へいけることでしょう。私らは武士です。多くは修羅道に落ちてしまいます。僧侶に比べれば駄目なのはお分かりでしょう。僧侶は首を失うような危ない目にも遭わないのですが殿の尊敬・寵愛は私らよりも十倍と言っても良いかもしれません。私らが矢玉の雨をくぐって、万死に一生を得ても僧侶には寵愛が及びません。殿の寵愛が篤い者が殉死するとすれば、そりゃ坊主共が一番でしょ。」

これを聞いた宇喜田直家は大変困り、

「ま、まあ、お前が言うことは、もったもじやな…。」

と、言い、戸川の諫言を受け入れた。

下克上でさんざんエグイ手を使ってのし上がってきた直家も、どうやら死ぬ間際に今までの所業の報いを恐れたのか心細くなったようです。そして、部下に、

「ワシと一緒に死んでくれるよね？」

と、念を押して回るといふ暴挙にでてしまったようです。

聞かれた部下達も内心は、

『うわ、俺は殉死する気はなかったけど。。。』

と、思いながらも、

『ここで殉死しません、なんて言ったら、俺、この人そんな好きじゃないって言ってるようなもんだし、明日からやりにくくなる。大体、この人無茶苦茶やるから、殉死しないと言うと逆恨みされて毒殺されるかも。どっちみち殺される・・・。』

と、考えて、

「お、お供致します。」

と、無理やり言わされた感があります。

多分、直家も無理やり言わした感があるのでしょうか。口先だけの約束で終わらないように、盃を交わすは、名前を書いた札を棺桶に入れろと指示するは、念には念を、で、かなり本気で相手を型にはめようとする様が見て取れます。若干、狂気すら漂っています。

ほんと、

「殉死するか、明日毒殺されるか」

の究極の二択を部下に迫っていたといえるでしょう。

部下達は、きっと便所とかで

「お前どうした？え、やっぱりお前も？ああ、やべえなあ、嫌だなあ。俺まだ暫く生きてるつもりだったんだけど……。」

という会話が盛んに交わされたと思います。

そんな宇喜田家中に一人、社長へ直言できる部下戸川秀安が登場します。

「そんなに一緒に死んで欲しいなら、命かけて戦ってるワシらよりも、アンタがいつも厚遇してる坊主共がふさわしいでしょ。武士は修羅道に落ちるけど、坊主は極楽へいけるんだから、あんた極楽に行きたきゃ坊主道連れにした方が良いよ！」

と、皮肉たっぷりに正論を吐きます。

取り乱していた直家も我に返ったのか、秀安の諫言を受け入れます。この諫言を受け入れたことで、宇喜田家は最優秀ブラック企業認定を免れたといえるかもしれません。

宇喜田直家。

結構あくどいことをやっていますけど坊さん厚遇していたんですね。よほど自分の所業に怯えていたとも言えます。戦国梟雄ランキングでは上位間違いなしの宇喜田直家の意外な一面を見た気がします。でも、

「おお、そうだな、秀安の言うとおり。坊主共、ワシと一緒に死んでくれるよな！」

と、言い出さなくて良かったですね。

ほんとに。

武田信玄の部将で板垣信形と並ぶ筆頭家老クラスだった甘利虎泰の子どもが今回の主人公甘利晴吉です。さほど史上有名な方とは言いがたい。

この方、若くして亡くなっており、享年三十一歳。

三方が原の戦いの後、病死したとも落馬によるものともいわれています。

信玄からの軍功の証文を九通得ている優秀な武将で、有能さは武田家中一、二を争い、三以下にはならないともいわれたとか。

戦国最強を謳われた武田家中で1, 2を争う有能さと言われた男、甘利晴吉。

長生きしていれば、長篠の戦いで武田軍が負けることも無かったのかもしれませんが。

さて、そんな彼には部下を大事にする話があります。

「士を愛す」

関東松山を攻めた時、晴吉の部下米倉丹後守の子、彦次郎が鉄砲に撃たれた。

従者が（彦次郎を）担いで退いたが、まだ息はあったものの血が体内に溜まり、腹が大きく膨れており息が絶えるのも時間の問題と思われた。

その時、側にいた者が「芦毛馬の糞を水に溶かして飲めば、血が抜ける事がある。」というので芦毛の馬糞水を彦次郎に与えた。

彦次郎は父に劣らず大剛の者であったが、眼を開いて言うには、

「胸元を前から後へ打ち抜かれて助かるものか。死ぬとわかっているのに、『彦次郎は命惜しさに馬糞を飲んだ。』などと死んだ後も嘲られては無念じゃ。武士が戦場で死ぬのは本望だ。」

と、言って飲まなかった。

すると、甘利晴吉は米倉彦次郎の所へ行き、

「彦次郎の普段の言葉とも思えぬ。もし血が抜けて傷が治れば主君には忠、父母には孝となる。死後の謗り（そしり）にこだわり忠孝の重さを忘れるとは、武勇ではない。」

と、彦次郎へ言うなり、晴吉は馬糞水を柄杓に受けて、ごくごくとふた口飲み、舌鼓を打って、

「よい風味だ！」

と、言って、手づから彦次郎に与えたので、彦次郎は涙を流して

「私が間違っておりました。お心遣いのありがたさ。たとえ命果てても、次の世でも忘れません。」

と、言って押し頂き一滴も残さず飲んだところ、忽ち腹の中の血が一桶分ばかり出て、傷は暫くして治った。

これを見た晴吉の同僚部下は感涙を流して、益々晴吉を慕った。

信玄はこれを聞いて、晴吉の忠節と士を愛する志を誉めた。

部下を愛する為、馬糞汁を口にす晴吉。

その心遣いに感謝し馬糞汁を飲む部下。

そして部下を愛する心が奇跡が呼び起こす。

主君の恩にむせび泣いた米倉家では以後「馬糞」を馬印にしたかもしれません。

全米が泣いた。。。

うーん。

なんなんでしょうね。

この、誉めれば誉めるほど「誉め殺し」感が出てしまうのは。

それは『馬糞』が主題だから。

そもそも、誰が「血出しには芦毛の馬糞汁」なんて言いだしたのか。

いくら治るからと言っても、

「殿、馬糞汁を！」

などと、部下が勧めれば、

「貴様、無礼討ちじゃあ！」

と、なってもおかしくありません。

罰ゲーム的なものが歪められて伝わり、広く信じられてしまった感じがしてなりません。

ところが、この芦毛馬の糞が体内の血出しによい、という話は、江戸時代に書かれた武士の心得や実務的な内容を描いた『雑兵物語』にも書かれており、この時代、広く流布していた治療法のようなものです。ひょっとすると雑兵物語は甘利晴吉の話の基に書かれた可能性もあります。

私に医学的な知識はありませんが、この説に疑問を感じてなりません。

例えば、なぜ鹿毛の馬のモノではダメで芦毛のモノだとよいのか。

だって、同じ馬という生物の内臓に芦毛と鹿毛で何か違いがあるとは思えない。芦毛の馬糞汁だから何か、ということは、普通考えにくい。葦毛の馬は絶対数で鹿毛に比べれば少ないので、その希少価値からありがたさを感じてしまったのではないか。

また、馬糞は農地の土壌改良などに効果が高いそうなので、植物への効果を動物へ勝手に効くと判断した、うっかりものがいたのではないか。

そのあたりはよくわかりません。

が、仮に迷信だとすると、そんな体に傷を負っているようなときに細菌が一杯いるようなものを口にすれば、下手をするとトドメを刺すことにもなりかねない。

もし、あなたが明日、銃で撃たれても、「あ、芦毛の馬糞汁を…」と懇望するよりは、救急車を呼ぶことをオススメします。

まあ、そんなものを口にすれば、健康な人でも吐き気を催すことでしょう。それが奏功したのか、米倉は桶一杯分もの血を吐きますが、果たして一桶分もの血を出して大丈夫だったのか、という疑問が残ります。

体重60kgの人だと、血液を1.5L程度失うと死んでしまうようです。

味噌樽のような桶一杯分ならば、間違いなく死んでしまうことでしょう。手桶一杯程度だったと思

われます。それに、純粋な血液だけでなく別の体液も混ざっていたのかもしれませんが。

に、しても、sonだけ大量の血っぽいものを吐いてるのを見ていれば、見ているほうも貧血気味になりそうです。

戦国時代の大將は、部下を救うために自ら馬糞汁を飲まねばならない、という、結構過酷な事態にも対応できなければならない訳です。

そういえば、この晴吉は早死にしていますけど理由は不明。、

本当は、今回のあまりな行動が遠因だったとしたら・・・。流石に家族や部下が死因を隠したがって、伝わってないのかもしれませんが。

真面目を追求すると面白みが出る場合があります。

命のやり取りという極限状態に置かれている戦国武将達の行動は、奇妙なおかしみに溢れているときがあります。

そんな武将達の動きを冷静に観察し、ツッコんでみる、という試み。

いかがだったでしょうか。

戦国武将達を少しでも身近に感じていただけたならば幸いです。

ツッコミの日本史

<http://p.booklog.jp/book/82291>

著者：うらにわ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uraniwa/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82291>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82291>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ